



生き生きとした組織のために

公立大学法人公立諏訪東京理科大学

理事長 北原 政彦

この歳までいろいろな組織に身を置いてきた。組織が生き生きしている状態を作ってきた多くのリーダーの姿を思い返しつつ、今の組織で、構成員が生き生きと活躍できるように何ができるのかということ絶えず自分に問いかけている。

もともと県の職員として社会人生活をスタートしたので、知事を支えることが職務と心得ていたが、実際には職分を守り、法令に基づく行政事務を行うという公務員としての職業生活に馴染んでいった。その際、尊敬できる先輩からは、行政権力の重さを教えられ、「いろいろな人が頭を下げてくる場面があっても、それは個人にではなく、机に頭を下げているだけだから勘違いだけはしないように」と言われた。このことは常に意識して勤めあげることができたと思っている。もちろん威張っている方々もおられたが、敬して遠ざけていた。

馬齢を重ね、知事と直接話ができるようになると、その警咳に接し、トップの責任の重さを間近で見せていただいた。そして、組織を生き生きさせるもさせないも、組織の長の人格によるということ、まざまざと見聞してきた。

公務員組織ということもあったが、職員人事で、知事の個人的な思いでの異例の抜擢は極力しないという方に仕えた。ひいきの引き倒しになることを自ら戒めておられたと感じている。

一方で、自らの権限を知らしめるために恣意的な人事をされた方もいた。職員集団を敵と味方に分けることとなり、組織に沈滞ムードが漂うかの感があった。

知事としての権限を極力使わないように自制した知事にも仕えた。行政は法令に基づいて行っているものであり、司々に任せるというスタンスで、職員に公務をしっかりと遂行させ、責任は知事がとるということを職員に向かって明言されていた。職場で闊達な論議が行われることを促していたと感じている。

その後、地方独立行政法人や独立行政法人で役員として組織運営や監査業務に従事することになったが、組織は多くの人で成り立っているという当たり前のことをしっかりと理解されているトップの方は組織に活力を与える一方、理解の薄い方の下では組織が活力を失うということを実感してきた。できれば前者として職分を果たしていきたいと考えている。